

音楽の学びのユニバーサルデザイン

明星大学・教授 阪井 恵
国立音楽大学・教授 酒井 美恵子

1 インクルーシブな教育環境と「学びのためのユニバーサルデザイン」

(1) インクルーシブな教育環境とは

「インクルージョン」は今や世界的なキーワードとなり、SDGs 2030 の 17 項目のうち第 4 項目は、「inclusive and equitable quality education（インクルーシブで公正な教育）を保障し、生涯にわたり教育を受ける機会を促進する」と明記している。「インクルーシブ教育」は、障害のある人を受け入れて共に学ぶという意味合いで受け取られがちだが、それだけにとどまるものではない。日本語の理解がおぼつかない、光や音に過敏である、特殊なアレルギーがある、ケガをして利き手が使えない、なども含めて、様々な事情で、学ぶための条件が整わない児童生徒がいるのは当たり前のことである。そのような、本人の責任に帰さない事情のために、情報から遠ざけられたり排除されたりすることなく、誰もが学べるように保障されている環境が、インクルーシブな教育環境である。

日本では 2021 年から、全ての事業所や教育機関に「合理的配慮 reasonable accommodation」が義務付けられた。これは「思いやり」などではなく、「合理的人権保障」の問題であるので、インクルーシブな教育環境に向けて法的には、一步の前進が実現したことになる。

(2) インクルーシブ教育を実現する「学びのためのユニバーサルデザイン (UDL)」¹

「合理的配慮」はあくまで「障害などがあると認定された人が申請した場合」に対応するもので、学校においても対象は限定的である。それに対して、現在日本で授業のユニバーサルデザインを牽引している研究者の多くが学んでいるのが、「学びのためのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning)」のガイドラインである。これは CAST (アメリカの NGO, Center for Applied Special Technology) が最新の脳科学の成果を根拠に研究し提唱している、「学びのエキスパート」を育成するためのガイドラインである。

UDL は、現代において何より大切なのは、学び続ける意欲と学ぶスキルを身に付けることだという考え方に基づいている。「今、これができる」より、新しいことに「取り組んでみよう」とする人、「学び続けながら他者とコラボのできる人」こそが必要な時代であることは自明である。UDL ガイドラインは、そのような意欲とスキルを身に付けた、学びのエキスパートを育てることを目標としている。そのために UDL が非常に重要視していることに、

- ① 一人一人が自分の学び方の特性を知るようになること。
- ② 学んでいる自分の感情や意欲や取り組み方をモニターできること。

がある。学びに向かい、自己理解の力をつけること、と言ってもよい。

例えば、注意が分散しやすく忘れ物が多い、というタイプであれば「持ち物リストを作りチェックする」習慣づけを、教師が助ける。じっとしているのが苦手な集中の続かないタイプであれば、そっと立って窓から外を見、深呼吸してから席に戻るのを認める。このような方法によって自分が学びに向かう気持ちを回復できる、ということを理解して実行できれば、ずっと楽に学べる。周囲も、みんなが同じにふるまう必要はないことを理解すればよい。このような考え方と導き方は、学習のコンテンツとは異なり、学習指導要領や教科書には明文化されにくいことである。日本の学校教育では、これまで弱かったところだが、現在「学びに向かう力」として学力の一側面と考えるようになったことと、大いに重なるものである。

2 音楽の「学び方」の多様性を認識して

音楽の学習プロセスは、脳科学の大発展に照らしても、なお未解明の点が多い。高水準の音楽家でも、様式やジャンルが異なれば、初心者同然に学び直しが必要になる。ただ、音を聴きとる力、音のまとまりをつかむ力、音の動きを記憶する力、音に反応する運動能力など、聴覚から入る情報の処理が得意であると、音楽の学習は成立しやすく、転移しやすい。

教科としての「音楽」の指導をUDLの考え方で見直すと、「聴覚からの情報を処理するのが苦手なタイプの人がいる」ということは、最も注意すべきポイントである。聴覚から入る情報（音）は、視覚情報や触覚情報と異なり、時間をかけて具体物を確認することができない。このため、教材である音の情報（楽曲やその一部分）をしっかり把握することはむずかしい。副次的な旋律を聴き取る、低音の動きを聴き取る、などは、注意を促せば自然にできるようになるわけではない。そこで昔ながらの、音の動きを身体動作に置き換えることによって理解する方法は、非常に有効な手立てになる。これはデジタル化が進んだとしても、音楽理解の本質に即したすぐれた方法であり続けるだろう。また、楽譜上で音の進行を捉えながら追うことも有効である。「一人1台タブレット」で、速度を変えたり、特定の音を目立たせて聴いたりしながら、納得のいくまで時間をかけることが認められれば、これまで「何となく」分かっていた多くの生徒も、飛躍的にクリアな理解を得ることができるようになるだろう。

しかし、多少なりとも楽譜を扱う段階になると、今度は「視覚的な情報処理の苦手な人がある」ことも視野に入れなければならない。五線譜は多くの情報を伝える複雑なものである。情報を絞った簡易的な楽譜で差し当たりの音楽活動への参加を容易にすれば、活動を通じて学びが成立する。文字譜、数字譜、図形譜、色音符による楽譜などが、昔から考案・使用されてきた。現在、筆者らは、色と形による「フィギャーノート」²という楽譜システムの普及に努めている。スタンダード化され一本化されたものが普及することが望ましいと思う。

そしてUDLの観点で大切なのは、みんなが同じ方法で学ぶ必要はなく、「自分が学びやすい方法」を各人が認識し、選択して使うのを当たり前と認めることである。これは、メガネや車いすの使用が認められるのと同じことなのだが、音楽の授業では、「一定時間内に一斉に音や声を出す」活動が特別に多いという実態があり、発想の転換が簡単ではない。「授業像」の思い切った見直し、今後は必要だと考えている。

3 だれもが楽しく学ぶことができる音楽活動のために

(1) 人生に大切な音楽

2020年からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による世界的なパンデミックは、2022年5月現在で終息していない。この2年間、学校ではオンライン授業、分散登校、児童・生徒一人1台のコンピュータ端末の整備等が行われ、多くの教員の努力によって、学びを止めない取り組みが展開された。合唱等のリスクの高い学習活動に対する文部科学省からの通知³が示されたことは記憶に新しい。そのような中、世界中で、異なる場所で録画したりリモート合唱やリモート合奏が積極的にインターネット上に発信され、歌い合わせる喜びや響き合わせる喜びの大切さ、それを味わう価値を再確認した。また、医療従事者などのいわゆるエッセンシャル・ワーカーの方々には様々な方法で感謝が伝えられ、音楽はその重要な手段のひとつであることを実感している。

生涯学習音楽指導員の皆様のような地域の音楽文化を担っていらっしゃる方々も、リモートレッスンやリモートお稽古などに取り組むなどご工夫を重ねられるとともに、音楽への人々の想いを感じ取られていることと拝察する。そして、世界的なパンデミックが終息していないとはいえ、我が国では、緊急事態宣言の発出もまん延防止等重点措置の公示もなされない期間となり、人々の対面での交流も盛んになってきている。このような中、新たに音楽を学びたいと思う人々も増えていることだろう。

文部科学省が隔年で実施している「子供の学習費調査」⁴では、各家庭が芸術文化活動に一定の支出をしていることがうかがわれる。また、アクサダイレクト生命の「第8回子どものおけいこ事に関する調査」⁵では、ピアノをはじめとするおけいこ事にオンラインレッスンが広がり、保護者が好意的に受け止めている実態がうかがわれる。

これらのことを踏まえ、以下学校の音楽の授業や習い事としての音楽の学びにおいて、だれもが楽しく学ぶことができる音楽活動のための視点を示す。

(2) 誰もが楽しく学ぶ音楽活動のための視点例

阪井・酒井（2018）⁶は、「いろいろな音の聴き方、聞こえ方」「いろいろな見方、見え方」「いろいろな覚え方、記憶の仕方」「いろいろな、うまくいかないこと」の視点で児童・生徒の様々な困りごとを示した。例えば、「楽器の個人練習の時間に音が重なることで気分が悪くなる」、「小さい音も大きな音も聞きとることができるため、聞こえすぎて疲れる」、「明るさが苦手な蛍光灯の光では白い紙に書かれた情報が読み取れない」、「読むことと書くことが苦手な、音楽では五線譜は情報が多すぎて読み取れない」等である。音楽の授業や習い事としての音楽の学びにおいて、困りごとの有無に関わらず誰もが楽しく取り組み、授業や習い事の目標に迫ることができるよう「学びやすい物的環境やルール」「授業や習い事を進める上での基本的配慮事項」の視点で具体策の一部を紹介する。

① 学びやすい物的環境やルール・【整理・整頓】【分かりやすい表示】：「音楽室」「音楽準備室」「レッスン室」「お稽古場」などにおいて、複数の指導者や学習者が物品を共有する場合、いつでも誰でも同じように取り出して片付けられるよう整理・整頓をし、表示等を工夫するとよい。例えば、取り出したり片付けたりする際に役立つ表示である（画像1）。このことにより、学習に集中できる環境

となる。例示した表示活用の他、机・椅子・楽器等の置き場所を床にテープなどでマークしたり、複数ある同じ種類の楽器や楽譜等には通し番号を書き込んで、置き場所や置き方のルールを示したりするとよい。

・【時間の厳守】：学校における授業はもちろんのこと、レッスンやお稽古事も、開始時刻や終了時刻を指導者側が守ることで、学習者が安心して学ぶことにつながる。

② 授業や習い事を進める上での基本的配慮事項

・【視覚情報と聴覚情報の併用】：「見たり読んだりして情報をとらえることが得意」「聞き取ることが得意」など、学び方の得意・不得意は人によって異なる。そこで、話す内容と文字情報等を組み合わせて授業やレッスン、お稽古等を進めたい。このことは、オンライン用の映像を作成する際にも心掛けると多くの学習者に分かりやすい教材となる。

・【個々のニーズの把握】合理的配慮は、学校では研修等を通じて理解が深まってきたが、地域の音楽文化を支える指導者の皆様にも理解を深めていただきたい。レッスンなどを始める前のガイダンスで、本人の音楽に関する学習歴をとらえるとともに、配慮して欲しいことなどについても聞き取り、指導に生かしてほしい。通常、個人や少人数が対象でカリキュラムの柔軟性の度合いが高いと思われるので、前述のフィギュアノートも有効に活用できるだろう。

(3) まとめ

誰もが楽しく学ぶことができる音楽活動の実現には、「誰もが学びやすい工夫」を常に意識して取り入れていくこととともに、学習者が自分のニーズに応じて方法を選択できるような、配慮とサポートが重要である。

参考・引用文献

1. 「学びのためのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning)」は、2013年頃から日本に紹介され始め、研究と実践が広がりつつある。UDL ガイドラインは <https://www.cast.org> より、日本語訳も読むことができる。ホール他著／バーズ亀山訳 (2018)『UDL 学びのユニバーサルデザイン』東洋館は、UDL の理論と科目ごとの実践を紹介している。
2. 「フィギュアノート」は 1996 年にフィンランドで考案された、色と形による楽譜システム。現在世界 23 か国で使用されている。日本では (一社)「フィギュアノート普及会 <https://happymuse.net/>」が、人気曲のフィギュアノート化や、吹奏楽の楽器に合わせたフィギュアノート譜の作成など、普及に取り組んでいる。
3. 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について (通知) (https://www.mext.go.jp/content/20201210-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf 2022.05.05 アクセス)
4. 子供の学習費調査 (https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa03/gakushuuhi/1268091.htm 2022.05.05 アクセス)
5. 第 8 回子どものおけいこ事に関する調査結果 (<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000129.000003328.html> 2022.05.05 アクセス)
6. 阪井恵・酒井美恵子著(2018)『音楽授業のユニバーサルデザイン』明治図書出版株式会社。



▲画像 1 片付け場所を示した楽器棚の例